

唐招提寺と如宝

—その美術史的意義—

齊藤孝

序

第一章 少僧都如宝伝

第一節 生立と来朝

第二節 鑑真和上入滅前の如宝

第三節 唐招提寺の経営

第二章 如宝の美術史的評価

第一節 如宝の意義

第二節 如宝の限界

結び

序

鑑真和上が亡くなって千二百年を迎えた昨今、いろ／＼な方面から鑑真和上に対する関心が高まってきたように思われる。和上その人の研究については安藤更生博士の業績が著しく、⁽¹⁾ そのほかにも先学の論攷はすこぶる多い。

さて、鑑真和上渡来の歴史的意義は、一般に仏教史・文化史・美術史などから問われているようである。第一に仏教史では、我国に戒律を伝え、それまで乱れていた我国僧尼の道を厳しく正し、あわせて天台学を将来して、来る平安仏教の素地を築いた功績をたゞえ、文化史では、奈良時代における日唐文化交流にはたした和上の役割を高く評価する。が、今美術史学の立場からは、唐代八世紀の芸術様式を我国に導入し、リアルで古典的な天平芸術から、いかにも超越的・非古典的な貞観芸術へと転換して行った当時の日本芸術界に、その指導的な影響を与えた人として、和上を認識しようとする動きが活発である。⁽²⁾ しかも、天平宝字三年（七五九）に和上が開き、同七年（七六三）にそこで亡くなった唐招提寺の存在が、その大きな証しとなっている。

私は、奈良朝後半期に鑑真和上が日本歴史に残した大きな足蹟を全く疑うものではない。しかしそれとは別に、今日も我々が目にするあの唐招提寺の建築や彫刻群が、鑑真自身の造営したものかどうかにいさゝか疑問を持っている。唐招提寺伽藍を現にかくあらしめた人は他に求められるのではあるまいか。私は、こゝに改めて唐招提寺第二世（一説に第四世）少僧都如宝の名を指摘したい。⁽³⁾

唐招提寺の造営における如宝については、もちろんすでに一部では注目されて来ている。けれども多くの場合、「唐招提寺の鑑真」の名声の前に、如宝の名はとかく薄れがちであった。しかしながら、もしも鑑真和上が我国の芸術に大きな影響を与えるところがあったとするならば、その弟子少僧都如宝を介して初めて一つの成果をみたものであると考え、如宝もまた、師の鑑真と共にその美術史的意義をもっと問われてもよい一人であることを信じつゝ、思う所を述べて大方の御批判を待つものである。

(1) 安藤更生博士「鑑真大和上伝の研究」（平凡社刊）及び「鑑真」（美術出版社刊）

(2) このようなみかたは、一応古くから引き続いているが、近年においても、例えば町田甲一氏は、芸術上の「時代」を切り拓

くいわゆる「天才」の概念を鑑真和上に適用して論じようときえされている。同氏「鑑真和上の来朝と唐招提寺の彫刻」国華八五八号 参照。

(3) この問題提起を私は前稿で行つておいた。拙稿「唐招提寺伽藍の創立をめぐる問題」本誌一五卷三号、「仮称『唐招提寺派』木彫仏群への一つの試み」(上・中・下) 史迹と美術三五七～三五九号。

第一章 少僧都如宝伝

第一節 生立と来朝

では、その如宝とはいかなる人物であろうか。とは言ふものの、この問ははなはだ難解である。なぜならば、彼に關する詳しい来歴が今日までほとんど伝えられていないからである。以下、あちらこちらの文献の片隅にわずかながら残された片々を綴り合せつゝ、彼の姿を少しかいまみてみよう。

第一、如宝の生立そのものが厚いベールのかなたにある。如宝は言うまでもなく、天平勝宝六年(七五四)鑑真和上に従つて渡来した随員の一人であつた。ところがその彼は、和上と同じ唐人≡中国人ではなかつたのである。淡海三船や思託の言をかりれば、彼は胡⁽¹⁾国人であつた。中国人が言うところの胡人とは、多くの場合西域人を指しているが、一方「胡」の語は、自らを中華の人と誇つてゐる唐国人が、彼らからみてはるかに未開な異境の民を見下げて呼ぶ時の総称でもあるから、けつきよく何民族なのかははっきりとしない。そこで彼は、一説に朝鮮国人ではないかとさえ考えられもした。⁽²⁾ 彼がはたして何国人かは別として、如宝の父母は異境からはるばると唐に來て彼をもうけたか、あるいは、彼は幼くして両親に抱かれつゝ唐土に渡つたものであろう。いずれにせよ、このようなわけで、彼の氏は早くから忘れ去られて、今日では全く知るよしもない。

次に、彼の生年も不明である。普通生年の知れない時は歿年と寿齡から逆算することができる。事実、如宝の歿年が平安時代の弘仁六年正月七日（八一五）であることは、ほゞ信じてよいものと思われる⁽³⁾。ところが、かんじんの寿齡の方が正しく伝っていないのである。たゞ招提千載伝記によれば

弘仁六年正月七日安然而化、居扶桑六十余年、齡迨三八旬云、

と述べているので、これをかりに八十ちようどで亡くなったものとする、唐は玄宗皇帝治下の開元二十四年、我国では聖武天皇の天平八年（七三六）のこととなり、これをひとまず彼の誕生の年としておこう。

そこで、幼・少年期を唐国で育った彼は、いつのころから楊州を中心に戒律を弘めている律僧鑑真の門をたゝいていた。こゝにおいて彼は「如宝」または「安如宝」の法名で呼ばれるようになったらしい⁽⁴⁾。彼の如宝と言う法名のいわれについては、後にもいろいろ伝説が生れている。即ち、彼は『南無如意宝珠』と称礼して財宝を得たので、上下の二字を取って「如宝」を名としたと言うのである⁽⁵⁾。尤も、如宝が出家したと言っても、もちろん最初から僧侶となつたわけではない。彼が唐の仏門でどのような身分に属したかは不明であるが、恐らく沙弥か憂婆塞であつたのであろう。が、こゝに良師を得た如宝は、やがて一人前の僧侶となる日を目標に、一生懸命仏道にはげみ、鑑真もまた、この異邦人の弟子のすぐれた素質を、いつしか愛するようになっていた。

さて、この鑑真を日本へ招くため、栄叡・普照の二人がはるばると唐に渡つて来たのは開元二十一年（七三三）、如宝の生れる三年も前のことである。従つて、如宝が師事したのは、度重なる渡航失敗にもめげず、日本布教の道心をますゝ固めつゝ、日夜苦心を重ねていた、まさにその時の鑑真であつた。こゝに如宝もまた、師の歩む日本への道に同じく従う運命を負うことになった。恐らく如宝が出家して間もない天宝十二載（七五三）、鑑真は第六次、最後の日本渡航を決行し、もちろん如宝もまた随員の一人に加えられて唐土を離れた。時に我国では天平勝宝五年のこと

あり、一行はその年の十一月に無事薩摩国秋目屋浦に安着し、翌天平勝宝六年（七五四）二月、はなばなしく平城京へ到着した。この時師の鑑真は六十七才、そして如宝は若二十才に満たない青年であった。

(1) 唐大和上東征伝。

(2) 招提千載伝記。

(3) 日本後紀、僧綱補任など。

(4) 東大和上東征伝、なお「安」字を冠した唐名には安息国人の場合が多いと言われる。彼が胡国人と言われていることと併せて考える必要がある。

(5) 七大寺年表、僧綱補任など。醍醐寺本諸寺縁起集所載の招提寺建立縁起の中で如宝を如意と書き誤った箇所があるが、あるいはこの説話に影響されたものかと思われる。

第二節 鑑真和上入滅前の如宝

さて、はる／＼日本へたどりついた鑑真と如宝にとって最も記念すべきことは、天平勝宝六年四月、東大寺大仏殿前で執り行われた授戒の儀であろう。この日聖武上皇はみずから壇に上って和上から菩薩戒を受けられたばかりではなく、皇太后・皇太子などをはじめ、下は沙弥証修ほか四百余人が受戒すると言う大盛儀であった。⁽¹⁾これは、あらゆる苦難を乗り越えた鑑真和上の日本伝戒の志が、みごと／＼に報いられた劇的一瞬であり、と同時に如宝にとって、多くの道俗に混って自らも壇に昇り、我が師の前にひれ伏して、師より親しく戒を授けられ、こゝに一人前の僧侶たることを証された忘れ得ぬ一日であったからである。如宝の僧籍はさっそく薬師寺に貫せられた。⁽²⁾

こゝで如宝の教学について少し触れよう。その第一に、彼は律学の忠実な信奉者であり、鑑真の滅後は戒律の弘通に身を捧げた一人であった。例えば、延暦二十三年（八〇四）正月二十三日の有名な如宝言上には⁽⁴⁾

招提寺者斯唐大和上鑑真為_レ聖朝_二所_一建也、（中略）以来殆五十年雖有_二經_一律_二未_レ經_二披講_一、（中略）伏望令_二永代_一伝

講使用_二賜田_一充_中律供儲_上、(下略)

と戒律道場としての唐招提寺の復興を願ひ、当時の人々もまた、

固_二持戒律_一無_レ有_二缺犯_一(中略)能堪_二一代之壇師_一者也⁽⁵⁾、

と彼を評していた。

ところが、少し時代が下った史料によると、如宝は単なる律僧ではなく、むしろ天台学の弘伝者として評価されて来る。その最もはつきりした顕れは応長元年(一三二一)に凝念の著した三国仏法伝通縁起であろう。この中で律宗の章に如宝の名がみえることはもちろんであるが、天台宗の章においても凝念は

和尚(鑑真) 門人法進・曇靜・思託・如宝等並天台宗学者也、

と記し、鑑真とその門徒たちのもたらした天台宗学が、やがて伝教大師最澄を登場させる基盤となったことを、詳しく論じている。また招提千載伝記の如宝伝でも『貫_二通律教_一発明台門_一』と言っているように、如宝の教学は、律と天台の二面性を持っていた。しかし、如宝における天台学の問題は何も後世のつくりごとではない。三国仏法伝通縁起の論述を待つまでもなく、師の鑑真和上の教学自体がこのような二重性をはらんでいた。これはほんの一例であるが、唐大和上東征伝の中の将来目録には、法華玄義・法華文句・摩訶止観のいわゆる天台三部経が含まれており、天長二年(八二五)二月八日の太政官符⁽⁶⁾も

夫天台宗者元天台山智者大師受_二思禪師所伝_一之教也、去天平勝宝五年十二月入唐副使從四位上伴宿禰胡滿竊請_二

楊州菴興寺和上鑑真同_レ船而歸、于_レ時和上天台法華獎来、(下略)

と述べていくくらいである。尤も、和上の伝えた法門には、このほかにも例えば禪などが含まれているが、鑑真の教学を支えるものは結局律と天台の二本柱であったと考えてよく、この二面性は法進・曇靜・義靜・法載・思託など

上の弟子たちがいずれも受け継ぎ、如宝も例外ではなかったわけである。

たゞ、この中でも如宝は、とりわけ師の鑑真に傾倒し、師の教を永く後世に伝えんとする悲願にもえていた。鑑真には、在唐時代から久しくそばに仕えもし、学問・修行共に年功を積んだ中国人の立派な弟子僧が幾人もいる。それにもかゝわらず、晩年の和上の目に、彼の後事を託するに足る者としてしだいに大きく映つて来たのは、異邦人で少壮ながらも傑出した素養を顯す青年僧如宝であつた。後、死に臨んだ鑑真は、自ら唐招提寺をこの如宝に付嘱することとなる。

それはさておき、我国へ来朝して以来の鑑真和上は、天平勝宝七年（七五五）に東大寺戒壇院の北に設けられた唐禪院に定住していたが、それから四年後の天平宝字三年（七五九）に平城京右京五条二坊の新田部親王旧宅地を賜つて戒院をおこし、唐招提寺の礎を拓いた。そしてこゝへ移り住んだ和上は、天平宝字七年（七六三）に同寺で亡くなつたわけであるが、その間に如宝が何処にいたのかゞどうも曖昧である。常識的には、鑑真の赴く所には常に如宝も従つていたことゝ想像されよう。ところがこゝに、彼は大和を離れ、はるか下野国の薬師寺に下つていたとする説がある。中でも招提千載伝記は、如宝は和上の生前からずっと下野薬師寺におり、師の臨終にわざ／＼東国から呼び戻され、唐招提寺を与えられたとしている。

この伝は今のところ肯定、否定の両方が可能である。まず肯定の立場からすると、この下野薬師寺は、東大寺・筑紫観世音寺と共にいわゆる天下三戒壇の一寺であり、東国における戒法弘通の拠点であつた。こゝへ鑑真和上の法門を帯した弟子僧の誰かゞ派遣され、布教を行うことは当然に考えられ、それが如宝であつたとしてもあえて不自然ではない。⁽⁷⁾ ちなみに、唐招提寺の経営に當つた如宝は、しば／＼『率⁽⁸⁾有縁檀主』⁽⁸⁾ いて造営を行った。これは、もと私寺に過ぎなかつた唐招提寺としては当然のことではあつたが、もしも彼が寺院の内に籠つてたゞ教理を勉強してい

たのみであるならば、このような善知識の結集などは思もよらず、従つて、彼には必ずや巷外に責極的な布教活動を行つた実績が伴つていたはずである。鑑真が如宝に唐招提寺をゆだねる氣になつた背景に、彼が社会的に築き上げていた信徒集団に期待するところがあつたとするならば、下野薬師寺における如宝の對外活動も、案外に真実らしく思われてくるのではないか。

たゞ問題は、如宝の下野下向説にどれほどの信頼性があるかと言ふことである。そこで、如宝に関して古文獻に『律宗、薬師寺僧』などとみえることが、後世になつて、この薬師寺は大和のそれではなく、戒壇のある下野薬師寺のことに違ふと誤解されて、先にのべたような説話が生れたものではあるまいか。と疑われてくる。ことに、如宝が唐招提寺の第二世になるについては、鑑真一人の意志で成就するわけがなく、周囲に如宝を推すだけの環境が整つていなくてはならない。その場合、はるか東国の辺地に下つていた如宝が、中央の大和での情勢を自己に有利な方向へリードすることがはたしてできたであらうか。こう観てくると、如宝はやはり大和の鑑真和上のそば近くに仕えていたとみる方がよさそうである。そして彼は、むしろ都人の中に帰依者をつくつて行つたのではあるまいか。

これと関連して、日本後紀の如宝卒伝に、彼が『至於呪願、天下絶疇』とみえることは重要である。即ち、如宝は律・天台の碩学であつたばかりではなく、一種の呪験者として評價されていたと言ふことである。さて、我國の宗教は、仏教の流入によつて高度の論理的体裁を整えることができた。しかし、一般的な日本人の奥底にある信仰感情は、まだきわめて次元の低いものであつた。彼らが願うところは究極的には現世利益の何物でもなく、それは僧侶の呪術的祈禱によつて引き出されるものと信じられ、僧侶の社会的評価は、多くはこの呪験力の大小にかゝつていた。このような仏教観・僧侶観は、何も庶民ばかりではなく、当時のインテリ階級を代表する皇族・貴族群にさえ非常に根強かつた。その彼らの求める現世利益の中でも重要なのは病氣の治癒である。律令政府は、迷信・邪教による療病

は世の乱れのもととして固く禁じながら、僧侶が仏法によつて治療するのはむしろ奨励し、皇室に不念のことがあれば、宮中に看病禪師が伺候した。この看病禪師に選ばれる僧は、もちろん学識の深い大徳たちであつたが、宮廷を入りする彼等は、結果として容易に上流人の心をつかみ、世の権力にしっかりと結びつくことができた。有名な玄昉や良弁も看病禪師になつており、遂に一国の政治を左右するに至つたあの弓削道鏡の栄達も、孝謙天皇の看病禪師に就いたのが最も大きな契機であつた。⁽⁹⁾ 続日本紀の鑑真卒伝にも、和上が皇后の看病に當つたことを特に述べているのも、この場合見落せない。尤も日本後紀に言う如宝の呪願が、はたして療病の効験を意味しているかどうかはわからないが、ともかく、彼もまた呪者として名を馳せたことは、かえつて如宝が多くの人心をしつかりとつかんでいた大きな証拠である。

如宝の仏教的周辺をだいたい以上のように眺めておいた上で、再び天平宝字三年（七五九）のことに話をもどそう。

この年鑑真和上は、東大寺唐禪院を和上直系の弟子で元は中国揚州白塔寺の僧であつた法進に譲り、自分は新田部親王旧宅地を賜つて一寺を興し、『唐律招提』の名を揚げた。⁽¹⁰⁾ この時和上について東大寺を去つた者に義静・法載・曇静・思託・如宝らが数えられたが、一方東大寺にはまだ法進・惠雲その他の僧が残っている。そこで鑑真和上の弟子たちは、おのずから東大寺と唐招提寺に分派する形となつてしまつた。ちょうど折も折、この鑑真が誹謗されると言う事件が持上つたのである。それがどのような内容のものはわからないが、これに憤慨した思託が、曲解された師の立場を擁護するため、有名な大唐伝戒師僧名記大和上鑑真伝（略称大和尚伝）を著したくらいであるから、かなり激しいものであつたらしい。⁽¹¹⁾

このように鑑真和上の唐招提寺移転の裏には多くの疑惑が渦巻いている。そこでこれに對して、今日いろいろな推測が加えられているわけである。今その中から福山敏男博士と安藤更生博士の説を参考にしてみたい。まず福山博士

は、和上が東大寺から唐招提寺へ移ったのは、必ずしも和上の責極的な意志ではなく、かねてから法進一派と思託派との間に対立があり、この年に思託派が和上を擁して別行動を起すに至ったものではないか、と解釈された。⁽⁹⁴⁾これは学界にかなりの波紋を投じたようである。これに対して安藤博士は、東征伝にも明かなように、鑑真和上は以前から彼の土地が福地であることを知っており、そこへ律学専修の道場を興したのであって、この和上の意図を疑うべき筋のものではない。また弟子僧の間に対立があったと考えるのも推測に過ぎよう。もし和上が誹謗されるほど東大寺との間に問題が生じたとするならば、その大きな原因の一つは、もと／＼東大寺唐禅院に宛てられていた備前国の水田一百町を、唐招提寺建立の財源に用いたことにあるのではなからうか。と反駁される。⁽⁹⁵⁾

実は私は、この唐招提寺と言うものを、戒律布教の第一線を引退した鑑真和上が、晩年をいこう安息所として建てられたのではないかと考えるのである。その意味で、和上が東大寺唐禅院を法進に譲ったのは、それなりに和上の意志であつたろうし、自分の直系によって唐禅院を継がせた鑑真は、やゝ傍系の弟子を引きつれて東大寺を出たのではあるまいか。その理由は、もし天平宝字三年当時、和上自身がまだ戒律布教と言う対外的な活動に熱意を持っていたとするならば、あの巨大な勢力の東大寺を背景とせずに、わざ／＼そこから離れてしまったことが解せないからである。あるいはこれを、和上が東大寺圏の外側に純粹な律宗の本拠を樹立しようと企てたのではないかと推測することもできよう。しかしそれならば、あの当時としてはむしろ官大寺として創立されるべきはずであり、鑑真和上の地位・声望からすれば、それも十分可能なことであつた。けれども唐招提寺の創建は、朝廷からは土地の斡旋を受けただけで、後は一切、和上の帰依者たちが善意の財や力を寄せるのを待つて行われたのである。

それと共に鑑真和上は、自分の引退と唐禅院の譲渡にかねてから周到な準備を行っていたらしい。例えば、和上は天平勝宝八年（七五六）五月二十四日僧綱の位に昇り、大僧都に任ぜられた。ところが、この時和上の弟子の中からは

唯一人彼の法進が選ばれて同じく僧綱に進み、律師に列せられたのである。⁽⁴⁾ このように、自分の一番弟子を僧侶として最も大きな権力を持ち、最も活躍しやすい律師と言う位に据えた鑑真は、中一年を置いた天平宝字二年（七五八）、綱務が煩雜で任に堪えずと称して急に致仕し、⁽⁵⁾ 全くの名譽称号に過ぎない大和上の号を受けるに甘んじた。そして翌天平宝字三年に唐招提寺を拓いているのである。このような経過は、先に示した私の推測をよく物語っているのではあるまいか。

尤も、この唐招提寺はたゞ単に和上晩年の安息所に過ぎなかったわけではない。恐らく、後進に道を譲り、世の俗権から身をしりぞけた和上は、ほゞ六十年を経て来た求法の道を改めて静に反省し、あわせて、多年築き上げて来た自が学問を、最も自由な心境において弟子たちに伝えたいと願いつつ、この寺を拓いたのではなかったろうか。故に和上は、世にことさら誇示すべき大伽藍を、はたして初期の唐招提寺に求めていたであろうか。唐招提寺の主要堂宇の内最先に建てられたものが、一般には伽藍の要と考えられている金堂ではなくて、むしろ教学の研鑽に必要な講堂であったこと、しかも和上の生前には、金堂はおろかその他の重な堂塔はほとんど何一つ建っていないかったことは、非常に重視すべきことである。⁽⁶⁾

これを一般には、私寺の唐招提寺には造営の財源が乏しく、ために工事が遅延したからである。と解されている。ところが、当時鑑真和上の外護者であった人々をざっと数えてみても、朝廷を初め、淡海三船・文室真人淨三・藤原刷雄・同魚名・佐伯今毛人・石上宅嗣・石川恒守など、そうくたる朝堂の貴顕が群っている。ことにこの人々の上にいた最も強力な後援者は、当時天下第一の権勢をほしまゝにしていた、惠美押勝こと藤原朝臣仲麻呂であった。⁽⁷⁾ これだけの人物がそろって大伽藍の造営に尽力をしたとして、なおたゞ一字の建立しか成し得なかったと言うのは、どうも不合理である。その講堂にしても敢て新材で創建もせず、わざわざ内裏の古殿を譲り受けている。私は、むしろ

ろこゝにこそ鑑真和上がこの寺に求めた本当の性格があると思う。初期の唐招提寺は、我々が今日目にするあの唐招提寺ではなく、続日本紀の編者がいみじくも述べたように、まさに戒院であつたのであり、それが和上の本旨でもあつたのではあるまいか。そして天平宝字七年（七六三）五月六日、鑑真和上はこの寺において遷化した。春秋七十七、時に如宝はまだ三十を出ない年ごろであつた。

- (1) 東大和上東征伝、延暦僧録所載勝宝感神聖武皇帝菩薩伝。
 - (2) 律苑僧宝伝卷第十 招提寺如宝律師伝・招提千載伝記上之一伝律篇 第四祖如宝少僧都伝。
 - (3) 七大寺年表・僧綱補任など。
 - (4) 日本後紀・類聚三代格卷二。
 - (5) 日本後紀弘仁六年正月七日如宝卒伝。
 - (6) 類聚三代格卷二。
 - (7) ちなみに、鑑真の法を受けて下野地方で布教した僧の一人に道忠があり、その道忠はしだいに天台の学へ傾き、中央にあつて最澄が天台宗の法灯を揚げると聞くや、さつそく一切経を書写して彼に送り、弟子の円澄を彼に師事させるなど、最澄とのつながりを深めている。このようにして下野は天台宗の強力な地盤となり、最澄の発願になる六所宝塔の一つはこの下野に建てられた。
 - (8) 招提寺建立縁起。
 - (9) 横田健一氏著「道鏡」人物叢書18（吉川弘文館刊）。
 - (10) 東征伝。
 - (11) 延暦僧録所載思託伝。
 - (12) 福山博士「唐招提寺建立年代の研究」東洋美術特輯日本美術史寧楽時代下。
 - (13) 安藤博士著「鑑真」一八九〜一九四頁。
 - (14) 続日本紀・僧綱補任。
 - (15) 同右。
- (16) 唐招提寺の諸堂宇の建立年代については、種々異論のあるところではあるが、私見については本誌一五卷三号の拙稿を参照

されたい。

(17) 安藤博士「鑑真」・堀池春峰氏「鑑真を廻る貴族の動向」大和文化研究一〇巻九号。

第三節 唐招提寺の経営

では、もとく鑑真和上個人への帰依に頼つて来た唐招提寺、今かけがえない支柱を失ってしまったこの寺を継ぐ弟子たちは、今後の方向をいかに見出したであろうか。それを私は、彼の東征伝に普照や思託の請言としてみえる創建意図や、延暦二十三年(八〇四)の如宝言上の内に探ろうとする。東征伝において、和上が自身の発意であるよりも、普照・思託の願を入れて唐招提寺を創建したように述べているのはいかゞと思うけれども

普照・思託請_下大和上以_ニ此地_ニ為_ニ伽藍_一、長伝_ニ四分律藏・法励四分律疏・鎮国道場飭宗義記・宣律師鈔_一、以_ニ持戒之力_一保_ニ護国家_上、大和上言、大好、

と言うこの二人の意図こそ、ほかならぬ、和上亡き後の唐招提寺が進むべき道筋であった。如宝が切々と朝廷に訴えたところも、なか／＼造営のはかどらない唐招提寺へ、この寺こそ鑑真以来の正流を伝える戒律道場として公認し、厚い庇護を加えられることを願ったのではなかったか。唐招提寺を名実共に律宗の本山として建立し、あわせて鎮護国家の道場とする。そして、こゝを彼らの活躍拠点とする。これが唐招提寺後継者たちのビジョンであった。

しかし、そのためにはまず、この寺にも戒律の權威を社会に大きく誇示すべき大伽藍が、改めて是非とも必要になってくる。ところが、もとく唐招提寺にはこれと言う経済基盤もなく、まして和上の歿後は、今までの檀越を最早そのまゝではあてにするわけにいかない。とりわけ、藤原仲麻呂を中心とするその外護者たちが弓削道鏡との政争に敗れ、和上の死と相前後して失脚してしまったのであるからなおさらである。従つて唐招提寺は、こゝに全く新たな財源を自らの力で開拓しなくてはならなかった。

第二に、もし唐招提寺が伝戒の正統を唱えて世に立つとすれば、かんじんの戒壇院をにぎり、すでにその道場として政府から公認されている東大寺唐禪院は、いったいどうなるのであろうか。東大寺側としては、もとよりこの新たな対抗者に激しい圧迫を加えるであろうし、両寺の間の紛争は、当然まき起らざるを得ないであろう。現に大江親通は、東大寺と唐招提寺との間に相論のあったことが旧記にみえる⁽¹⁾と指摘している。

そのような事態に当り、あの強大な東大寺にたゞ真向から対抗するだけでは、事がうまく運ぶわけがない。むしろ、東大寺の鋭鋒をかわしつつ、妥協すべきは妥協して、彼の寺の容認と保護を受けるように持つて行くだけの政治力が必要である。このように、唐招提寺の前途にはなみ／＼ならぬ障崖が立ちはだかつていたのであり、これを克服するには、唐招提寺伽藍の造営に自己の生涯をかける熱意と、それを実現すを卓越した手腕の持主が登場しなくてはならなかった。私は、その人物こそ如宝にほかならないと考えるのである。

唐招提寺伽藍の成立を説く最も確な史料は招提寺建立縁起であるが、その流記の条は、如宝が先師鑑真の後を継いで伽藍を造営したことをにかせている。たゞ、この書を編した豊安は、そも／＼如宝の直弟子であるから、師の如宝を良いように書くのは当然で、その点ではかなり割引いて取らねばならない。次いで三國仏法伝通縁起・律苑僧宝伝・招提千載伝記などでは、いずれも如宝が鑑真和上より親しくこの寺を付嘱されたと述べている。しかしこれらはまた、和上は義静・法載にも後事を託し、この三人が力を合せて以後の経営に務めたとも記している。そこで、造営の功をいきなり如宝に帰することはできず、義静や法載のことも十分考慮に入れておかねばならない、さらに、あの大和尚伝を著して気を吐いている思託は、唐招提寺の次の発展にどのような役割をになっていたであろうか。

さて、義静はもと中国揚州興雲寺の僧で、在唐のころからすでに鑑真の弟子として名を著しており、年齢や学問の点からみて如宝とははるかに先輩であり、鑑真歿後の唐招提寺にあって最も重きをなした一人であった。現に、彼が

金堂の本尊盧舍那仏像を造立したことはほど信じてよく、さらに、開山堂には、有名な鑑真和上像の傍に義静の画像が懸けられていたと言⁽⁸⁾う。これからみても、義静もまた和上の偉大な後継者として早くから寺内で尊ばれていたことがわかる。けれども、義静についてはその他に確な事蹟がほとんど伝わらず、歿年さえも明かではない。彼が我国に來朝した時すでに相当の年齢に達していたはずで、仮に奈良時代いっばいは生きていたとしても、平安時代のごく初めには亡くなったものと思われる。また法載は中國衢州靈耀寺の僧であるが、來朝後に伝灯大法師位を受けたものゝ、唐招提寺では、僧房の一部に彼の造営と伝えるものがみえる程度で、特に目立った功績も見当らない。

一方、第三の思託は相変わらず盛に活躍しており、延暦七年ごろにはこれも有名な延暦僧録を著している。また、唐招提寺伽藍は、如宝や義静よりもむしろ思託の功に擬する史料もある。⁽⁴⁾しかしこれらの文献は多く近世のもので、十分に信を置き難い。それよりも東征伝の中で、和上が唐招提寺を創建したのは自分の意見によったものだと言⁽⁵⁾うほど、自己宣伝臭の強いあの思託が、彼の延暦僧録の内へわざ／＼自伝を編入した上で、神護景雲年間に勅によって西大寺八角塔の像を造ったとか、宝龜年間には、同じく勅によって東大寺に攘災大仏頂行道を修したことなどを記しながら、天平宝字七年以後の唐招提寺については一筆も触れていないではないか。これは少くとも、このころ思託の活躍の場は、むしろ唐招提寺を離れていたことを示しているのではなからうか。以上のようなわけで、鑑真歿後の唐招提寺伽藍の發展を顧る時、我々は、やはり如宝の上に目を止めずにはおられないのである。

こゝで私は、再び日本後紀弘仁六年の如宝卒伝に彼の人柄について

局量宏遠、有^二大國之風^一、

と述べている点に注目したい。この文から推察されることは、如宝は思慮が深く、しかもあらゆる人々を度量の内に温く包容する大きな器であつたらしいと言⁽⁶⁾うことである。このような人格には、巧まらずして豊かな政治性が自然に養わ

れているものである。この政治性こそ、これからの唐招提寺になくてはならぬものであった。

第一に、先にも指摘したように、鑑真亡き後のこの寺は、新に財源獲得の運動をおこす必要があった。これはもちろん、この寺の外周に厚い檀那層を育成することにある。如宝の功績の第一は、この善知識の結集にみごと成功したことであつた。それをもう少し詳しく述べると、如宝は、鑑真生前の信者たちの一部を、和上の歿後にもよく唐招提寺に結びつけていた。唐招提寺の食堂は、和上の死後延暦ごろまでの間に建立されたが、これは『藤原仲麻呂朝臣家』が施入造立したものである。⁽⁵⁾ また延暦十一年(七九二)前後に、藤原清河の遺族は、清河の旧宅を施入して、羅索堂と僧房の内西二房と呼ばれるものを建立した。⁽⁶⁾ 仲麻呂のことはすでに述べたが、藤原清河は、鑑真和上の渡海を助けた第十次遣唐使の大使であるから、この縁で清河一家は代々唐招提寺にかわらぬ援助を捧げていたのであろう。しかも、その食堂や羅索堂は、如宝が本確的にのり出して来た延暦期に建てられている。

これより先、恐らく宝亀年間に、如宝は有縁の檀主をひきいて今日我々が目にするあのすばらしい金堂を建立した。また、ちょうど同じころ、如宝は越前国に六十町歩に及ぶ寺領を買取つたが、延暦二十三年の如宝言上に応じて下つた太政官符⁽⁷⁾によれば、『用^ニ知識物^一所^ニ買^一』のものであつた。さらに宝亀七年(七七六)、備前国津高郡津高郷で三段三十二歩の畠を購入した時も、恐らくこの知識物を利用したのであろう。⁽⁸⁾ このように如宝は、和上生前の信者とはもとより、彼自身も数多くの知識を集め、彼らの寄捨をもとにしてまず寺領を獲得し、これを経済基盤として伽藍の造営を着実に推し進めて行つたのである。

招提寺建立縁起によれば、他寺の僧侶でありながら、恐らくこの如宝との親交によつて唐招提寺に寄進造立したのではないかと思われる者が散見される。例えば、四天王寺の慈子法師と言う僧は金堂に鰐口一口を懸け、葉師寺の僧惠元は、この寺に西南僧房一字を興し、有名な大僧都賢環は一切経を書写して納めている。この内慈子法師について

は知るところがないが、恵元の場合、もとくゝ如宝の僧籍が薬師寺にあったこと、また、如宝はやがて僧綱に昇るが、その綱所が奈良時代には薬師寺に置かれていたこと、などがあるいは縁となっているのではあるまいか。特にこゝで見落せないのは賢璟である。賢璟は尾張の人で姓は荒井田氏、元興寺の僧で唯識を学び、鑑真の来朝以前にすでに大僧であつた。ところが和上が我国に來つて彼と戒法を問答するに及び、賢璟は翻然と和上に服し、旧戒を捨てゝ和上より具足戒を受けた。その後彼は⁽⁹⁾大僧都に昇り、平安京の遷都に當つてその地相を卜するなどの偉業を残しつゝ、延暦十二年(七九三)十月七日、八十才で亡くなつた。が、こゝで私が取り上げたいのは、彼こそいわゆる善知識の結集に大きな実力を持った人物だつたと言うことである。即ち、沙弥滿願が多度神宮寺を拓いた時、賢璟は郷党をひきいてこの寺に三重塔を建立した。⁽⁹⁾これは有名な事実である。その賢璟が唐招提寺にも手をさしのべたと言ふことは、おりから知識たちの助力を心から求めているこの寺にとって、実に有難い人物であつたのではなからうか。

さて、如宝の第二の仕事は、言うまでもなく東大寺と唐招提寺の和解である。彼がそれをどのような方法で計つたのかは必ずしも明かではないが、次の事実もまたその一端ではあるまいか。即ち如宝は、延暦十六年(七九七)三月八日、唐招提寺側としては唯一人僧綱に任ぜられて律師となり、大同元年(八〇六)四月二十三日には少僧都に進んだのであるが、その律師時代の延暦二十三年(八〇四)六月、東大寺は、かねて持っていた山城国相楽郡蟹幡郷の寺領を他に譲る代り、もつと平城京内に新たな土地を望み、その交換相手を求めていた。そこで、多治比真人弟笠・從三位紀朝臣勝長と東大寺との間にそれく契約が成立し、前者については六月十日付で許可する旨の僧綱牒が出され、後者については六月二十日付で券文が立てられた。⁽¹⁰⁾ところが、この二文書にいずれも如宝が署名している。これは、彼が僧綱の一員として形式的に名を列ねたに過ぎないとも取れはするが、私はやはり、如宝が自己の政治的地位から東大寺のために何らかの尽力をした一例ではないかと考たい。

その故か東大寺は、如宝と唐招提寺にむしろ好意ある便宜を与える場合すらあった。例えば、先にも触れたように、唐招提寺は知識物を以って越前国に六十町歩と言う広い土地を購入しているが、この越前こそ、当時の東大寺にとっても最大の地盤であるから、紛争の相手方がその方面へ進出するのを坐視しているはすがなく、それが可能であったところに、両寺の関係が最早スムーズになっていた証拠がある。また、これと同じ意味で、唐招提寺の津高郡津高郷を初めとする備前国での寺領獲得運動も、創草期におこった『備前国水田一百町歩』に関する東大寺とのいざこざが解決をみていずには考えられないところであろう。

以上のような努力を基にして、如宝はそこからさらに進んで朝廷へ近ずき、唐招提寺を官寺化することにも成功していた。言うまでもなく、奈良時代当時、一つの寺院を最高の格式を以って興すためには官寺として公認されねばならず、その代り、一度官寺ともなれば、伽藍の造営には律令政府から有形無形の恩典・庇護が加えられるのである。けれども、これは比較的早く実現したもので、すでに孝謙天皇からは勅額を賜っていたが、朝廷の支援は宝亀ごろになってはつきりと責極化し、宝亀七年（七七六）には播磨国の食封五十戸が施入され、翌八年（七七七）七月二十六日には、備前国に十三町歩の寺領を与える太政官符が下った。⁽⁴⁾

ところが、そこへ降って湧いたのが延暦十三年（七九四）の平安遷都であった。いよいよこれからと言う時期にさしかゝっていた唐招提寺にとっても、これは大きな痛手であつたろう。南都世界は、今や新政府からしだいに忘れ去られようとしている。このまゝでは唐招提寺自身も窒息してしまうはかはない。延暦二十三年の如宝言上は、この意味で如宝にとっても必死のものがあつたのではなからうか。

しかし、平安京との接触を計る如宝の対策も功妙と言うべきであつた。それは、彼が一早くあの弘法大師空海と親交を結んだからである。空海と言え、中国から正純密教をたづさえて帰り、今や平安仏教の大立物となっている。

唐招提寺と朝廷との仲立をしてくれる者として、これほどうってつけの人物がまたとあらうか。この空海を通して朝廷に働きかけた如宝は、再び唐招提寺に封戸五十戸を獲得したのである。それは、空海の筆になる「為_二大德如宝_一奉_レ謝_二恩賜招提封戸_一表」⁽⁴⁵⁾によってわかる。これは、唐招提寺に朝廷から封戸を賜ったお礼の表を、空海が如宝に代って起草したものであるが、勿論空海がたゞ単に表文の起草者であつたとは考えられず、空海が如宝のためにこれまでの労を執つたと言うことは、封戸施人にも彼が何らか直接の関与をしていたと認めるべきであらう。こゝに言う封戸は、表文中に『如宝随_レ師遠投_二聖朝_一六十于今矣』⁽⁴⁶⁾とみえることからすると、如宝のごく晩年のことと思われ、弘仁三年（八二二）七月の封戸を指しているのであらう。また、如宝がどこで空海と知り会つたかと言うと、恐らくそれは東大寺である。当時空海は南都に進出し、東大寺内に真言院を興していたからである。けれども、この空海を待つまでもなく、このころの如宝に対する朝廷の恩寵はますます厚く、朝廷は弘仁元年（八一〇）四月、江沼臣小並らを遣して唐招提寺に三重塔を建立した。⁽⁴⁷⁾

以上のような幾多の曲折を経て、唐招提寺は如宝の生涯にほぼ完成をみるに至つた。如宝時代にできた諸堂・諸仏については本誌一五卷三号の拙稿や、本稿につけた別表を参照していただきたいが、その中で、如宝が造立したと伝える建築や彫刻が、他の人々にくらべていかに圧倒的に多いかよくわかる。このように自己の悲願を一応成し遂げた少僧都伝灯大法師位如宝は、弘仁六年（八一五）正月七日、完成した唐招提寺を愛弟子豊安に譲り、安然として入寂したと伝えられる。

別 表 I 唐招提寺の建築（創建期）

名 称	造 立 年 代	造 立 者
金 堂	宝龜年間	如 宝
講 堂	天平宝字七年以前	鑑 真（平城京朝集殿施入）
食 堂	天平宝字七年～延暦頃	伝藤原仲麻呂朝臣家施入
経 楼		如 宝？
鐘 楼		如 宝？
絹 索 堂	延暦十一年前後	藤原清河一族
八 角 堂（薬師院）	延暦以前	義 静？
八 角 堂		伝宋義演大徳
開 山 堂（影 堂）		
南 大 門		
中 門		
西 南 門		
北 土 門		
東北一房・同二房・東一房		
・ 同 二 房		} 法 載
西北一房		義 静
西北二韓		鑑 真（和上住房）
西 一 房		
西 二 房	延暦十一年前後	藤原清河一族
西小子房		如 宝
西北後房		
西北後小子房		如 宝（如宝住房）
西 南 房		薬師寺僧惠元
温湯室・政所・炊殿		
・ 西井殿・一甲倉・二甲倉		} 寺 家
・ 三 甲 倉		
塔	弘仁元年	江沼臣小並
廻 廊	天長元年以降？	平城天皇旧殿施入？

別表Ⅱ 唐招提寺の彫刻（創建期）

名 称	造 立 年 代	造 立 者
盧舍那仏坐像（金 堂）	宝亀年間	義静（漆部造弟麿・物部広足）
千手観音立像（金 堂）	宝亀～延暦？	伝天人作
薬師如来立像（金 堂）	延暦期？	如 宝（乙尊・寺奴）
梵 天 立 像（金 堂）	延暦～弘仁	如 宝
帝釈天立像（金 堂）	延暦～弘仁	如 宝
四天王立像（金 堂）	延暦～弘仁	如 宝
弥勒如来像（講 堂）	天平宝字年間？	伝軍法力作
脇侍菩薩像（講 堂）	天平宝字年間？	伝軍法力作
不空羼索観音（羼索堂）	延暦十一年前後	（伝鑑真将来）
八 部 衆 像（羼索堂）	延暦十一年前後	（伝鑑真将来）
商伽羅王像（羼索堂）		
障子薬師浄土（食 堂）		（薬師院八角堂安置と同じ物？）
鑑 真 和 上 像（開山堂）	天平宝字七年以降	

別表Ⅲ 唐招提寺の絵画・工芸（創建期）

名 称	造 立 年 代	造 立 者
薬師浄土画像（薬師院八角堂）	延暦以前？	藤原種継
義 静 画 像（開山堂）	延暦期？	
如 宝 画 像（開山堂）	弘仁六年以後	
玄奘三蔵及弟子画像		
鰐 口（金堂）		四天王寺慈子法師
鐘（鐘楼）	弘仁六年以前	如 宝
一切経	延暦期？	賢 璟
舍利容器一具（宝蔵）	唐八世紀	鑑真将来

（註） この表は招提寺建立縁起をもとに、諸書を勘案して作製。

- (1) 七大寺巡礼私記唐招提寺編纂堂条。なお安藤博士も福山博士も、阿寺の相論を唐招提寺の創建当初のこととしておられるが、私は、むしろ鑑真歿後の唐招提寺第二期の初めに、本当の問題が表面化したのではないかと思う。
- (2) 招提寺建立縁起金堂条。
- (3) 同右開山堂条・七大寺巡礼私記。なお、藤原時代に親しく唐招提寺へ参詣した大江親通は、開山堂の鑑真像の左右には義・静と如宝の画像があつたと述べている。
- (4) 南部唐招提寺略録・唐招提寺縁起拔書略集など。
- (5) 招提寺建立縁起（護国寺本諸寺縁起集）。
- (6) 同右・日本後紀。
- (7) 類聚三代格卷二。
- (8) 宝龜七年十二月十一日付備前国津高郡津高郷陸田売買券。
- (9) 多度神宮寺資財帳。
- (10) 日本後紀・僧綱補任。
- (11) 平安遺文第一卷24・25。
- (12) この勅額がいつごろ寺へ下賜されたかは明かではない。唐招提寺が創立された天平宝字三年は、すでに孝謙天皇は退位され、淳仁天皇の御宇になっている。従つて、孝謙天皇が重祚され、称徳天皇となられた天平神護年以後に下されたものを、同一人と言うことから、いつしか孝謙帝の名で伝えられることになつたのではなからうか。
- (13) 続日本紀。
- (14) 延暦二十三年正月の太政官符所引（類聚三代格卷二）。
- (15) 性靈集卷四。
- (16) 日本後紀。
- (17) 同右。

第二章 如宝の美術史的評価

第一節 如宝の意義

では、以上のような如宝を、我々はどうのような立場から評価すべきであろうか。まず仏教徒としての彼であるが、なるほど、彼は師の鑑真から唐招提寺を託されたことよりしても、すぐれた僧侶であつたことには変りがない。けれども、それでは如宝がユニークな仏教思想家であつたかと言うと、あながちそうでもないようである。彼は、鑑真和上の説くところをそのまゝ継承してゐたに過ぎないようであり、むしろ師の教学をいかに忠実に後世へ伝えるかに心をくだいてゐた。その故か、彼には特に注目すべき仏教上の著述もないようであり、和上の弟子の中では、大和尚伝や延暦僧録などを次々と世に出した思託の方が、よほど精神史・思想上の意義は大きいであろう。如宝の歴史的意義、それは結局、今日我々が目にする、あの唐招提寺伽藍を造営したと言う功績に帰するのではなからうか、その唐招提寺の建築・彫刻群は、まさに我國の代表的な芸術である。こゝにおいて如宝は、美術史の立場からこそ初めてその真価が問われるべき人物であつたことが明かとなつた。

八世紀の後半、我國の芸術は初唐・盛唐様式を基調とする天平芸術から、中唐・晚唐様式を中核に持つ貞觀芸術へと変遷した。しかし、このように急激な様式変化には、我國の工匠たちへ責極的に働きかけ、その方向へ彼らたちの作風を導いた一種のアート・ディレクターが必ずや存在したことであろう。このような仮説を今彫刻芸術の上にあてはめてみると、当時の彫刻とは事実上仏像であるから、仏像と言うものに最も深い認識と最も確なイメージを持ち、その仏像を礼拝対象として常に求めている者はほかならぬ僧侶である。そこで、仏像彫刻の様式変遷には、それを造

立させる僧侶の信仰表象及び美的表象の発展が前提され、仏師に注文を出す僧侶の影響も無視できないことゝなる。こゝにおいて、アート・ディレクターとしての僧侶の存在が、改めて意識されてくるわけである。そして、このような立場から多くの先学によって注目されて来たのが鑑真和上なのであった。

けれども、私は今、我国芸術界に対する直接的な影響の意義を和上に認めようとするのはいさゝか早急にすぎるのではないか。いろ／＼考えて行けばそれは案外根拠に乏しいように思われ、鑑真のもたらしたものを真に日本芸術の内部に定着させた者は、むしろ彼の弟子たちの中にこそ存在するのではなからうかと思ひ当ったわけである。そこで、唐招提寺伽藍の造営者、少僧都如宝の名が浮び上つて来る。

尤も、伽藍の造営者がそのまゝ芸術的指導者に一致するとは限らないから、如宝もまた無条件に指名することはできない。ところが、こゝで私が特に興味深く取り上げたいのは、金堂の諸仏の内本尊の盧舎那仏を造立したのは確に義静であるが、脇侍の薬師如来立像^(a)、及び梵天・帝釈天、それに壇上四隅の四天王がいずれも如宝の造立と伝えられる事実である。言うまでもなく、義静は鑑真直系の弟子で唐・国人である。その彼が発願した本尊ならば、さぞ唐の様式による仏像であらうとは、誰しも想像するところであらう。ところが、あの丈六盧舎那仏坐像は脱活乾漆の保守的な天平様式の影刻であり、久野健氏も説かれるように^(b)、すでに伝統的な東大寺官工房系の仏師の手になるものと考えられる。これに反して、如宝は生れこそ唐土ではあつても一生のほとんどは日本で過している。それにもかゝらず、彼の造った仏像は、本尊よりも新しい木心乾漆の技法が用いられ、作風にも唐八世紀以後の様式が濃厚に認められる。また、私が先に仮称「唐招提寺派」の名で考察した講堂の木彫群は、とりわけ唐の新様式の影響を受けた作品であるが、これは今のところ如宝造立の伝はないものゝ、如宝が実際の活躍に入つた延暦期に造られている。このことはいかに解釈すべきであらうか。

さて、例えばこゝに、深く仏教思想を探究し気高い信仰に生きている僧があつたとしても、その精神内容がそのまゝ彼の内部で仏の表象に結びつくとは限らない。言いかえれば、その僧侶の宗教意識が仏にあるか法にあるかによつて、仏像に対する彼の態度はおのずから異つて来る。今、義静についてみると、もしや彼は、鑑真に学んだ律学あるいは天台学と言う、いわゆる法の面に關心を集中していたのではなからうか。従つて、自ら金堂本尊を仏師に命じながら、その像が盧舎那仏の儀規を充たしてさえおれば、たとえ先進唐国人の眼からみていかにも保守的な作風であっても、義静はあえて意に介さなかつたのであらう。その意味で、唐人義静が天平芸術界に与えた新しい刺激は、事実上ほとんど何も無かつたのではあるまいか。

これとは逆に如宝は、我国に師が伝えた法は、日本にとつて全く新しい仏教であり、その精神はまた、今までとは異なる新しい仏の姿で具現されねばならないと考えたやうである。しかもこの新仏教には、これまた唐八世紀の新文化が裏打ちされている。故に、そこにはおのずから、肥満した肉体と重厚な精神性をたゞえる唐代八世紀風の尊容が求められてくるであらう。この新しい仏のイメージは、如宝自身若年ながらも唐土で見聞して来た諸仏、それに、師によつて我国に伝えられた多くの新様図像によつて培われたのであらう。鑑真和上の教学の内、法の面を継承したのが法進や義静などであるとするならば、仏の面を受けてそれをより広く推進したのが如宝であつた。そして彼は、自己の仏像表現意欲に基いて造仏に従う工匠を指導し、その中から天平に代る貞観芸術の創造者をしだいに育成して行つたのではなからうか。

それにしても、如宝はどうしてこのような役割が可能であつたか。また、彼はなぜ特に唐招提寺へこれほどの情熱を燃したのか。これらの点について思う所を以下に述べておこう。さて、鑑真とその弟子たちが我国に渡来した時、彼らは我國民によつて非常な崇敬を以つて迎えられた。けれどもそれは、こちらよりもはるかに進んだ思想や文化を

持つ中国人に対する、奈良時代人の畏敬の顯れに過ぎない。一方、来朝した彼らにしても、高度な唐の文物があるがまゝの形で将来することはできても、彼ら自身が日本人の心情を素直に理解し、我國の实情に応じた形式でそれを日本人の内部に定着させる努力を実際に払い得たであろうか。彼らの「中華の民」と言う高い意識、また、互に異民族であり文化的背景も異るところから生ずる微妙な感情の行き違いなどが、はたして無形の障害となっていなかったであろうか。ことに、芸術家の内面に働きかけてその作風を変えさせようとする時には、影響を与える側とそれを受ける者との間には、人間の深層において互にしっかりと触れ合う所がなければならぬ。では、鑑真やその弟子たちが、はたして日本人と言うものにそれほど親密であり得たかどうか……。

ところが、その中で如宝一人は他の僧と少々事情が異っていた。なぜならば、先にも触れたように、彼が来朝したのは若干二十才を越えない年ごろであり、それ以後八十才までの長い生涯を彼は日本の風土で過し、彼の人格もまた日本によって育てられたのである。故に、民族的には異邦人の如宝も、心情的にはまさに日本人そのものであったに違いない。そこに彼が、仏師たちの心を己が心として彼らに深く溶けこめあえる余地が、十分に存在するわけである。と同時に重要なのは、その如宝が奈良朝人から、けっして彼らと同じ日本人としてではなく、鑑真和上と共に渡来したと言う意味で、常に唐国人として観られていたことである。けれどもこれが逆に、当時の日本人への如宝の発言や行動に大きな權威を与えることになった。それは、唐招提寺の造営に従事する工匠の上にも、より強い影響力となって顯れてくずにはおかぬであろう。私は、こゝにこそ少僧都如宝の歴史的意義は尽きると言いたい。

と同時に、同じ鑑真の弟子たちの中で、如宝が特に唐招提寺の建立に熱意を傾けたことを、やゝ推測に過ぎるようではあるが、大体次のように考えている。如宝は、その生立の項で述べたように元来漢民族ではなかった。その彼が中国僧の間に立ち混っている時、周囲からどのような眼で観られ、どのような扱いを受けたかは想像に難くない。彼

が鑑真に随行して日本へ渡る決心をしたのも、あるいは中国のきずなから離脱した別世界で、自身の活路を見出そうとしたからかもしれない。しかし、日本へ渡った後も彼は、民族的にも学術・年齢の面においても他の弟子僧と常に激しく競走せねばならない位置にあった。が、幸にして、偉大な鑑真和尚の仏法の前にはあらゆる者が平等であった。如宝のすぐれた素質をみこんだ和尚は、民族の違を超えて彼を大きく抜擢したのである。如宝が師の鑑真に心の底から傾倒し、和尚の最も忠実な信筆者たろうとしたのも、まさにこの感激に発していた。一方、彼自身の大きな人格と豊かな政治性は、その周囲にも誤った偏見を捨てさせ、いつしか彼を容認させて行つたものであろう。

ところが、やがて鑑真和尚入滅の時 came。こゝで如宝が改めて自己の周辺を見廻した時、師より譲られた唐招提寺以外に彼の安住の場所はなく、彼が世に名を上げる道は、この唐招提寺を一大寺院に発展させ、師の教風を天下に宣揚する以外に残されていなかった。こゝに、如宝の生涯をかけた唐招提寺経営事業が興されるのである。

以上述べて来たところによつて私は、今日一般には「鑑真和尚の唐招提寺」として認識されているあの寺を、もつと「如宝の唐招提寺」として再評価すべき余地があるのではないかと考へるのである。

- (1) もう一方の脇侍である千手観音立像は、天人の作と言われる。
- (2) 「唐招提寺」(近畿日本叢書)彫刻解説。

第二節 如宝の限界

しかし、この如宝にもやはり大きな人間的限界があつた。私は今まで唐招提寺を如宝の寺として説いて来たけれども、それは、この寺の発展過程の実態がそうだとするまでであつて、実は、この伽藍が完成した当初においてさえ、唐招提寺を如宝の寺などと思へる者は一人もなく、如宝自身さえそれが自分の寺などとはこゝから先も口にしてはいないのである。いや、むしろ彼は、まるで己れを無にするかのように、この寺は我が師鑑真和尚の創建した寺であ

り、その教学を伝承する道場であることを、世間にくりかえし叫びつづけて来た。後世、代々に残る史料がいずれも和上の建立をうたい、如宝の名を忘れ去っているのも、実は如宝自身が蒔いた種とも言い得るのである。

では、これほど苦しい思をしてやっと築き上げたこの伽藍に、如宝はどうして自分の名を揚げることができないのであろうか。その一つは、やはり師の鑑真の名声があまりにも大きかったからである。奈良朝・平安初期の人々の心に、六度の失敗を乗り越え、自分は失明してまでもあの戒律を我国に伝えた、偉大なる唐僧鑑真大和上の名はすでに伝説化し、その尊宗の念は最早全く固まっている。とりわけ唐招提寺は、あの和上が天平宝字三年に自ら拓き、同七年に入寂を遂げたその寺であると言う觀念が、一般にあまりにも深く浸透しつくしている。そこへ今さら、この寺に如宝の名を持ち出してみても、どうして世間が受け容れてくれるであらうか。悪くすれば、それを逆手にとつて、彼の敵対者がどのような反撃を加えるか知れたものではない。即ち如宝は、鑑真の後継者であることによつて初めて世に認められているのであり、師の名を背景とせずにはとうてい一本立てできない小さな自分であることを、彼は痛いほど思い知らされていたのである。と同時に、もと／＼政治家膚であり、機をみるに敏な如宝は、目的完遂のためには、自己の面子が少々傷つくことくらいは意に介していなかったようなところもある。彼はひたすら師の名を表に立て、甘じてその後に身をひそめたのである。

けれども、これをさらにつっこんで述べるならば、如宝のつた鑑真教学の伝承者と言う態度は、本当に単なる政治的ジェスチュアに過ぎないのであろうか。実は案外、こゝの所が彼自身の本音でもあったのではなからうか。と言うのは、彼が師と仰いだ僧には鑑真のほかこれと言う人が見当らず、仏徒たる如宝の内容は、何から何まで鑑真から伝えられたものであった。とすれば、如宝が師の鑑真を超えることはとうていできるはずがなく、必然的に和上の分身にたがざるを得なかったわけである。そこで今、如宝が奈良・平安朝の彫刻界に与えた影響も、これが如宝独自の

ものと言うことはできず、むしろそれが鑑真和上の伝えた様式なのであった。その意味で、貞観影刻のアート・ディレクターとして鑑真を評価することもまた、けっして誤りではなかったとも言い得るのである。

けれども私は、鑑真和上が我国の芸術上に与えたものは、あの如宝を通して初めて定着したものである以上、如宝をぬきにしたこれまでの評価は、やはり片手落ちと言うべきであり、そこに如宝の存在を認めてこそ、その師鑑真和上の意義もまた、より正しく認識されるものであることを、再びこゝに強調しておきたいと思う。

結　　び

私は、貞観影刻の諸問題に注目しつゝある一人であるが、その一つの手がかりに、かつて仮称「唐招提寺派」木彫群を追求した。その折、自然に唐招提寺の歴史にも興味を持つようになったが、中でも第二世（一説に第四世）の如宝がかなり著しい業績を残しているが、今まで、彼の伝記や歴史の意義を責極的に取り上げた論攷が少ないように思われた。そこで、美術史的立場から私なりの評価を下してみたものが本稿である。

唐招提寺やその芸術についてもまだく未知の分野が広い。大方の御教示を待つものである。

（関西学院大学文学部助手）